

2. 児童票(2～6年生)

調査では全学年の児童から回答を得ているが、本章では共通する質問項目が多い 2～6 年生の回答を分析する。

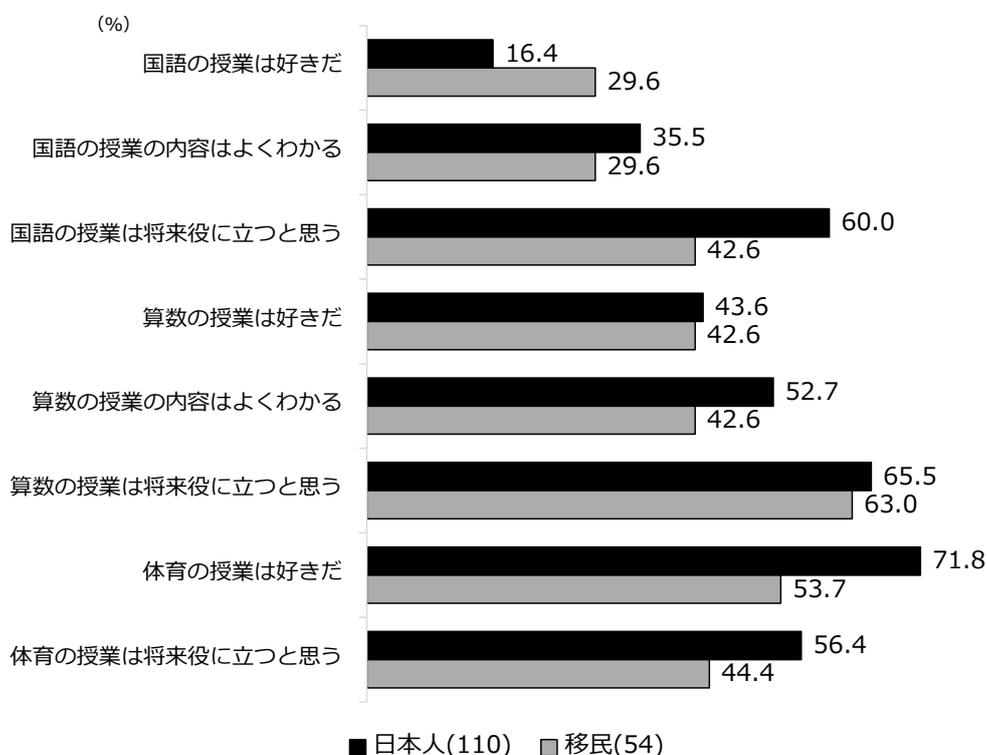
2.1 学校の授業

国語・算数・体育の授業について、好きかどうかや将来役に立つと思うかをたずねた(図表 2-1)。なお国語に関しては、その時間に日本語教室で授業を受けている児童は、日本語教室について回答をしている。

「好きだ」という設問に対して「とてもあてはまる」と回答した割合をみると、日本人は国語 16.4%、算数 43.6%、体育 71.8%となり、体育を好きと思う割合が圧倒的に高い。一般的に児童を対象とした調査では体育や図工などの実技・技能系教科の人気が高い結果が多く、A 小学校においても同様の傾向といえる。移民では国語 29.6%、算数 42.6%、体育 53.7%であり、国語が好きな割合は日本人を上回る一方で、体育に関しては下回っている。

国語・算数のみでたずねている「よくわかる」という設問に対する回答をみると、国語は日本人 35.5% > 移民 29.6%、算数は日本人 52.7% > 移民 42.6%と、いずれも日本人のほうが高かった。また、「将来役に立つと思う」という設問に対する回答では、国語は日本人 60.0% > 移民 42.6%、体育は日本人 56.4% > 移民 44.4%と差が生じたのに対して、算数はいずれも 6 割台であった。

図表 2-1 学校の授業



注) 「とてもあてはまる」の%。

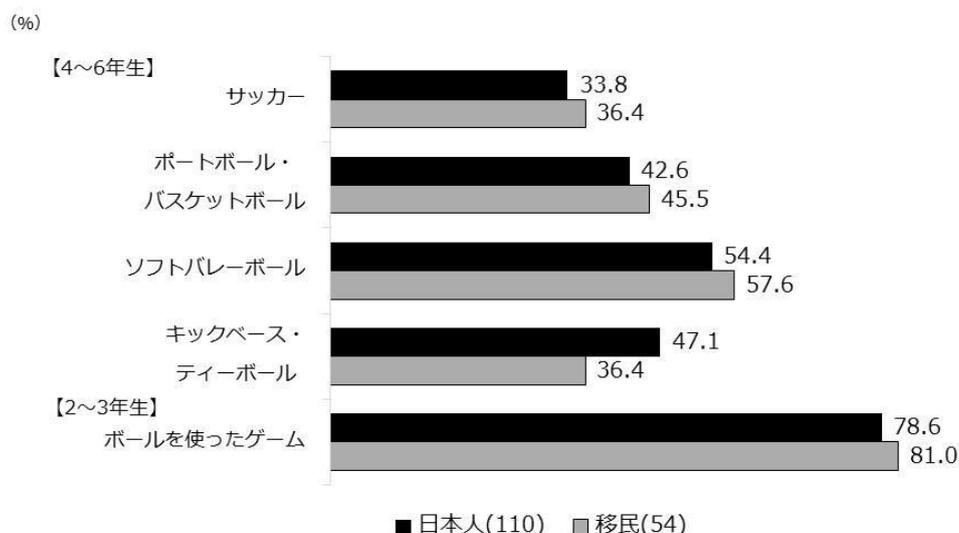
2.2 体育の単元

体育の各単元の内容について、好きかどうかをたずねた。学習指導要領上では2学年単位で具体的な内容が示されているが、本調査では2～3年の2学年、4～6年の3学年に対してそれぞれ1種類の質問紙を使用するため、学年を超えてある程度共通する内容を取り上げている。調査項目では指導要領上の単元名をそのまま使用せず、児童が理解しやすい具体的な運動・スポーツの名称で表現し、「ゲーム(4年)/ボール運動(5・6年)」に関しては実際にA小学校で実施している球技を入れている。学年ごとに項目が異なるボールゲームやゲーム、ボール運動に関する単元を図表2-2-1に、全学年に共通してたずねている単元を図表2-2-2にまとめた。

まず図表2-2-1をみると、2～3年生の「ボールを使ったゲーム」を「好き」と回答した割合は日本人78.6%、移民81.0%といずれも高く、図表2-2-2を含めたすべての単元の中で最も人気が高い。4～6年生をみると、「サッカー」(日本人33.8%、移民36.4%、以下同)、「ポートボール・バスケットボール」(42.6%、45.5%)、「ソフトバレーボール」(54.4%、57.6%)の3つは日本人と移民の差がみられず、「キックベース・ティーボール」では日本人47.1%>移民36.4%と、日本人のほうが10.7ポイント高かった。図表は割愛するが4～6年生のみのデータをみると、すべての単元の中で日本人の1位は「ソフトバレーボール」、3位は「キックベース・ティーボール」、移民の2位は「ソフトバレーボール」、3位は「ポートボール・バスケットボール」となり、ボールを使用する単元を好きな児童が多い。

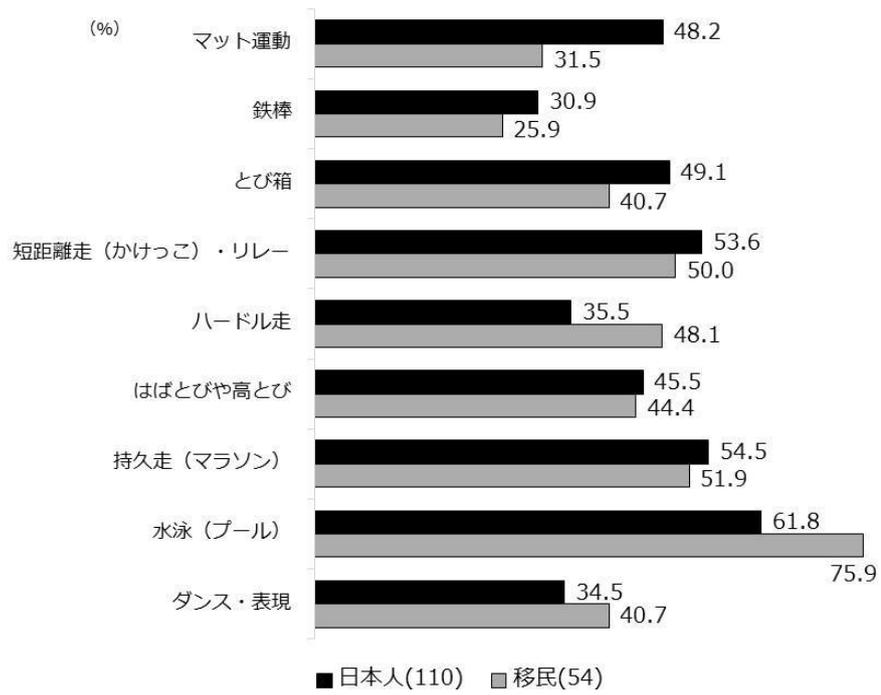
次に図表2-2-2でその他の単元を「好き」と回答した割合をみると、「水泳」は共通して人気が高く、日本人61.8%<移民75.9%と、特に移民で好きな児童が多いことがわかる。移民には宗教上の理由で水泳の授業が受けられない児童もいるものの、来日してはじめてプールを経験し、楽しむ児童も多いと推察される。また、「ハードル走」(35.5%<48.1%)や「ダンス・表現」(34.5%<40.7%)も、移民のほうが高い傾向にある。一方で「マット運動」(48.2%>31.5%)、「鉄棒」(30.9%>25.9%)、「とび箱」(49.1%>40.7%)といった器械運動の単元では、いずれも日本人より移民の割合が下回り、5～17ポイント程度の差がみられる。馴染みのない児童も多く、移民の指導における難しさが浮かび上がる。

図表 2-2-1 体育の単元(ボールゲーム/ゲーム/ボール運動)



注)「好き」の%。

図表 2-2-2 体育の単元(その他の単元)



注 1) 「好き」の%。

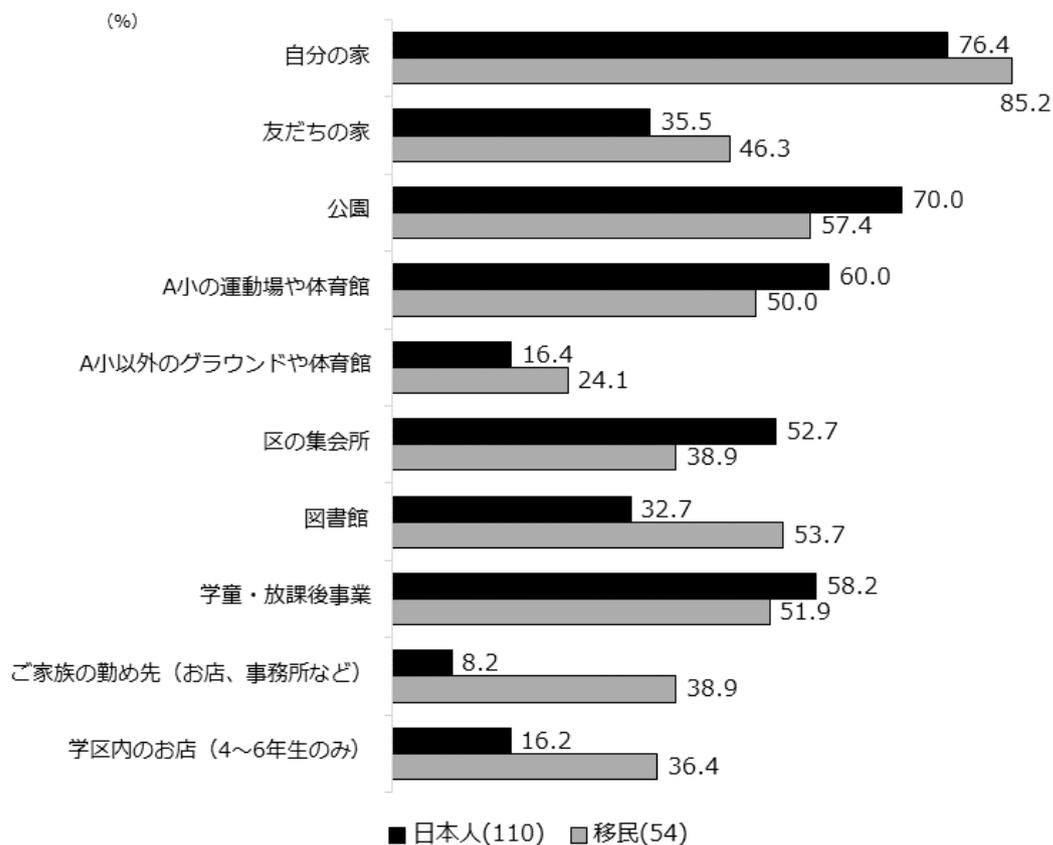
注 2) 「ハードル走」は 3 年生以上にたずねている。

2.3 遊ぶ場所

普段遊んでいる場所についてたずね、「よく遊ぶ」と「ときどき遊ぶ」の合計値を示した(図表 2-3)。日本人では「自分の家」76.4%、「公園」70.0%、「A 小の運動場や体育館」60.0%の順に多く、移民では「自分の家」85.2%、「公園」57.4%、「図書館」53.7%と続く。両者の差をみると、「自分の家」「友だちの家」「A 小以外のグラウンドや体育館」「図書館」「学区内のお店(4~6年生のみ)」は、移民のほうが10~20ポイント程度高い。「ご家族の勤め先」は日本人が8.2%であるのに対して移民では38.9%に達し、家族が勤めるお店や事務所で時間を過ごす児童が多いことがわかる。

反対に「公園」「A 小の運動場や体育館」「区の集会所」では、日本人のほうが10ポイント以上高い。多くの日本人児童が遊ぶ公的な場所では、移民の児童が日本人ほどには遊んでいないという事実は、子どものスポーツや運動遊びの環境を考える上で重要な知見といえる。

図表 2-3 遊ぶ場所



注 1) 「よく遊ぶ」+「ときどき遊ぶ」の%。

注 2) 「区の集会所」「学童・放課後事業」については、質問紙では具体的な施設名や事業名でたずねている。「区の集会所」は集会室や子どもの遊び場などを備えた区の施設である。

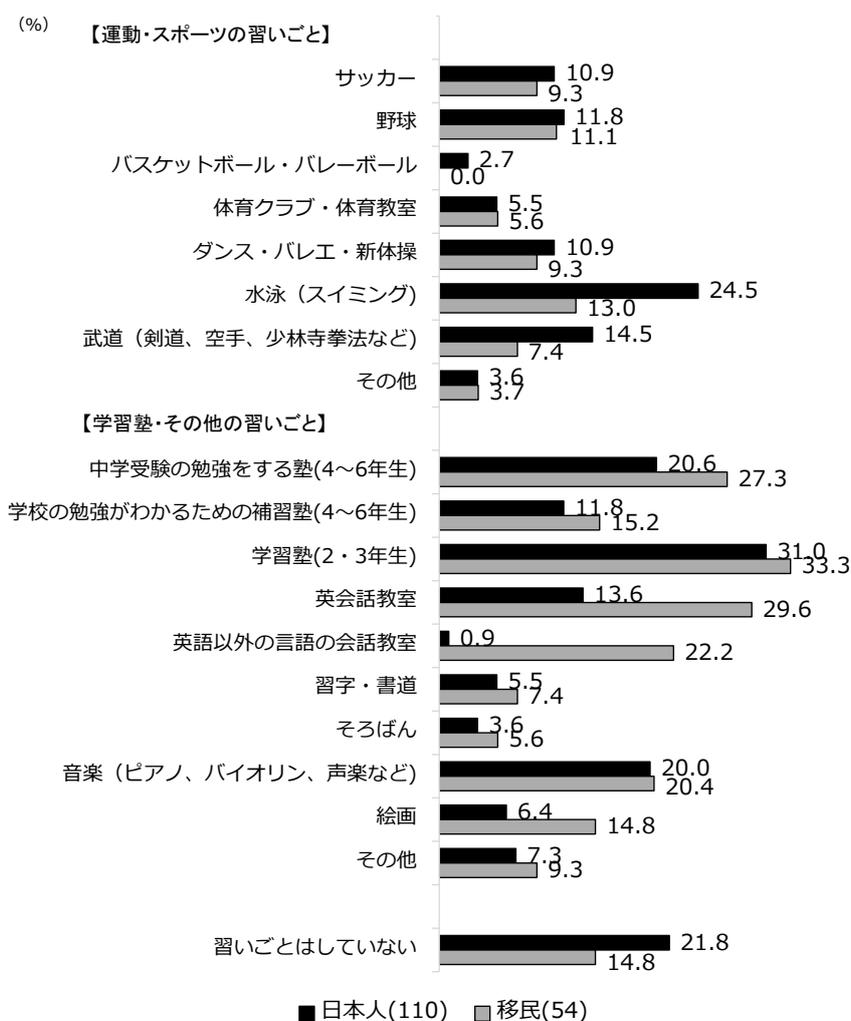
2.4 習いごと

現在行っている習いごとについてたずねた(図表 2-4)。運動・スポーツの習いごとを種目ごとにみると、「水泳(スイミング)」で日本人 24.5%>移民 13.0%と 10 ポイント以上の差がみられた。そのほかは「サッカー」(日本人 10.9%、移民 9.3%、以下同)、「野球」(11.8%、11.1%)、「ダンス・バレエ・新体操」(10.9%、9.3%)など同程度の実施率であった。1 種目でも習いごとをしている児童の割合を算出すると、日本人 55.8%>移民 36.8%となり、日本人のほうがスポーツの習いごとをしている割合が高い(図表割愛)。

学習塾・その他の習いごとにおいて、特に差が大きいのは「英会話教室」(日本人 13.6%<移民 29.6%)、「英語以外の言語の会話教室」(日本人 0.9%<移民 22.2%)で、いずれも移民のほうが多く実施している。「英語以外の言語」には中国語など保護者の第一言語が含まれ、母語教育の役割を果たしている可能性がある。移民の保護者も子どもにスポーツの習いごとをさせたいという意向は強い(3 章 8 節参照)ものの、これらの教室との両立や時間の調整が難しい側面もあると考えられる。

なお、「習いごとはしていない」の割合は日本人 21.8%>移民 14.8%と、7.0 ポイントの差がみられた。

図表 2-4 習いごと



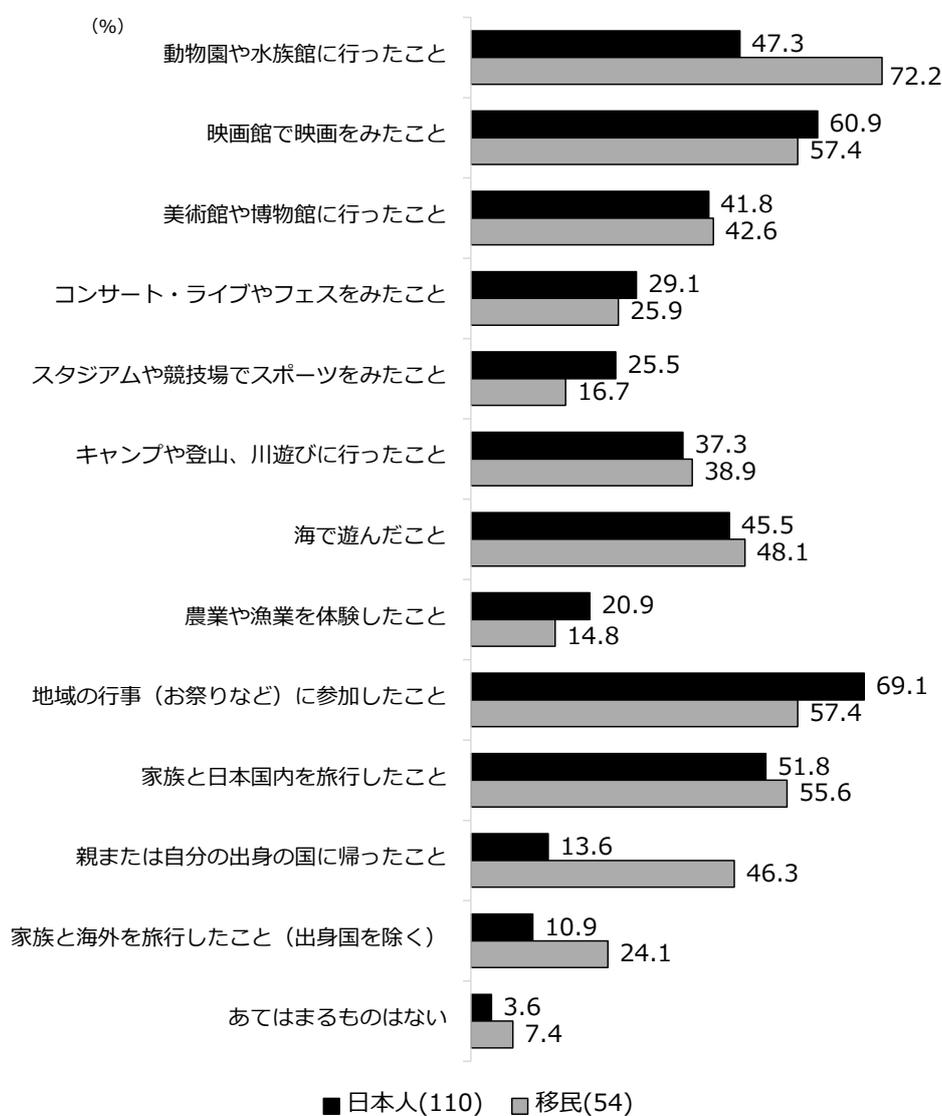
注) 複数回答。

2.5 体験

児童が調査当時の学年になってから体験したことのある内容(学校行事は除く)を複数回答形式でたずねた(図表 2-5)。「映画館で映画をみたこと」「地域の行事に参加したこと」「家族と日本国内を旅行したこと」の3項目は、日本人・移民ともに5割以上の児童が経験している。両者の差がみられた項目に着目すると、「地域の行事に参加したこと」(日本人 69.1% > 移民 57.4%、以下同)は日本人のほうが、「動物園や水族館に行ったこと」(47.3% < 72.2%)、「親または自分の出身の国に帰ったこと」(13.6% < 46.3%)、「家族と海外を旅行したこと」(10.9% < 24.1%)は移民のほうが、それぞれ10ポイント以上高い。

「スタジアムや競技場でスポーツをみたこと」は日本人 25.5%、移民 16.7%であった。性別との関連をみると、男子では日本人 33.3%、移民 23.5%、女子では日本人 17.9%、移民 5.0%となり(図表割愛)、特に移民の女子はスポーツを直接観戦する体験が非常に少ない。

図表 2-5 体験



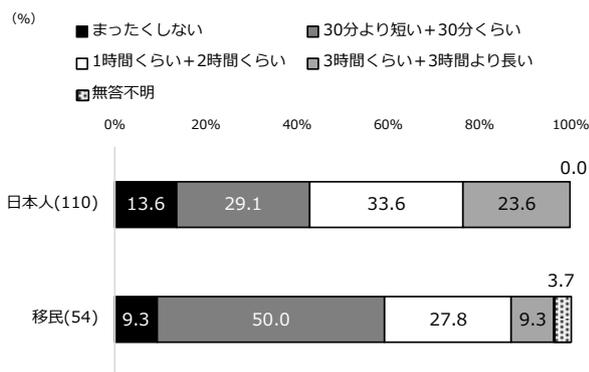
注) 複数回答。

2.6 スポーツや運動遊びの時間

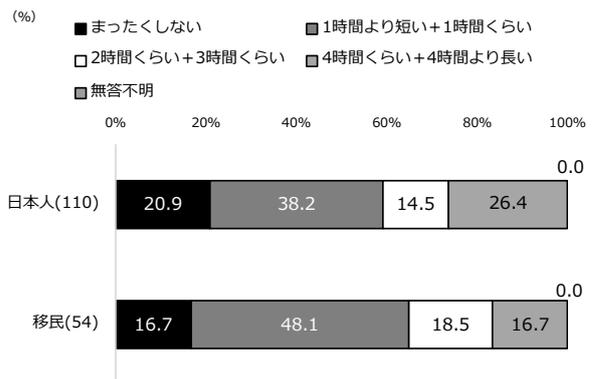
平日および休日に、「スポーツや体を動かす遊びをする」時間についてたずねた。平日の時間をみると、「まったくしない」の割合は日本人 13.6%、移民 9.3%と大きな差はみられない(図表 2-6-1)。「30 分より短い」と「30 分くらい」を合わせた割合が、日本人 29.1%<移民 50.0%と移民のほうが多いのに対して、「3 時間くらい」「3 時間より長い」を合わせた長時間層は、日本人 23.6%>移民 9.3%と日本人のほうが多い。休日の時間をみると、日本人では「まったくしない」20.9%、「4 時間くらい+4 時間より長い」26.4%と、まったくしない層と長時間層がいずれも 2 割を超えているのに対して、移民ではそれらが 1 割台にとどまり、「1 時間より短い+1 時間くらい」が 48.1%と高くなっている(図表 2-6-2)。日本人に長時間層が多い点は、スポーツの習いごとの有無や種目(2 章 4 節参照)も影響していると推察される。

また、それぞれの回答をもとに、週あたりのスポーツや運動遊びの時間を算出した(図表 2-6-3)。具体的には、「まったくしない」を 0 分、「1 時間より短い」を 30 分のように数値に換算し、「平日の時間×5+休日の時間×2」の計算を行っている。こちらも「0 分」の割合は日本人 10.9%、移民 9.6%とほぼ変わらないが、「1~420 分未満(1 日平均 1 時間未満)」は日本人 33.6%<移民 50.0%と移民が多く、「1,260 分以上(1 日平均 3 時間以上)」は日本人 21.8%>移民 7.7%と日本人のほうが多くなっている。

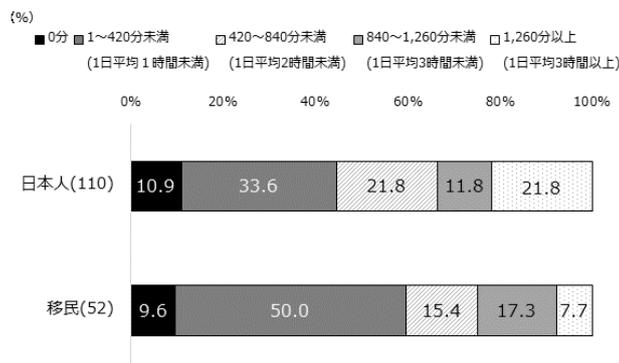
図表 2-6-1 平日のスポーツや運動遊びの時間



図表 2-6-2 休日のスポーツや運動遊びの時間



図表 2-6-3 週あたりのスポーツや運動遊びの時間



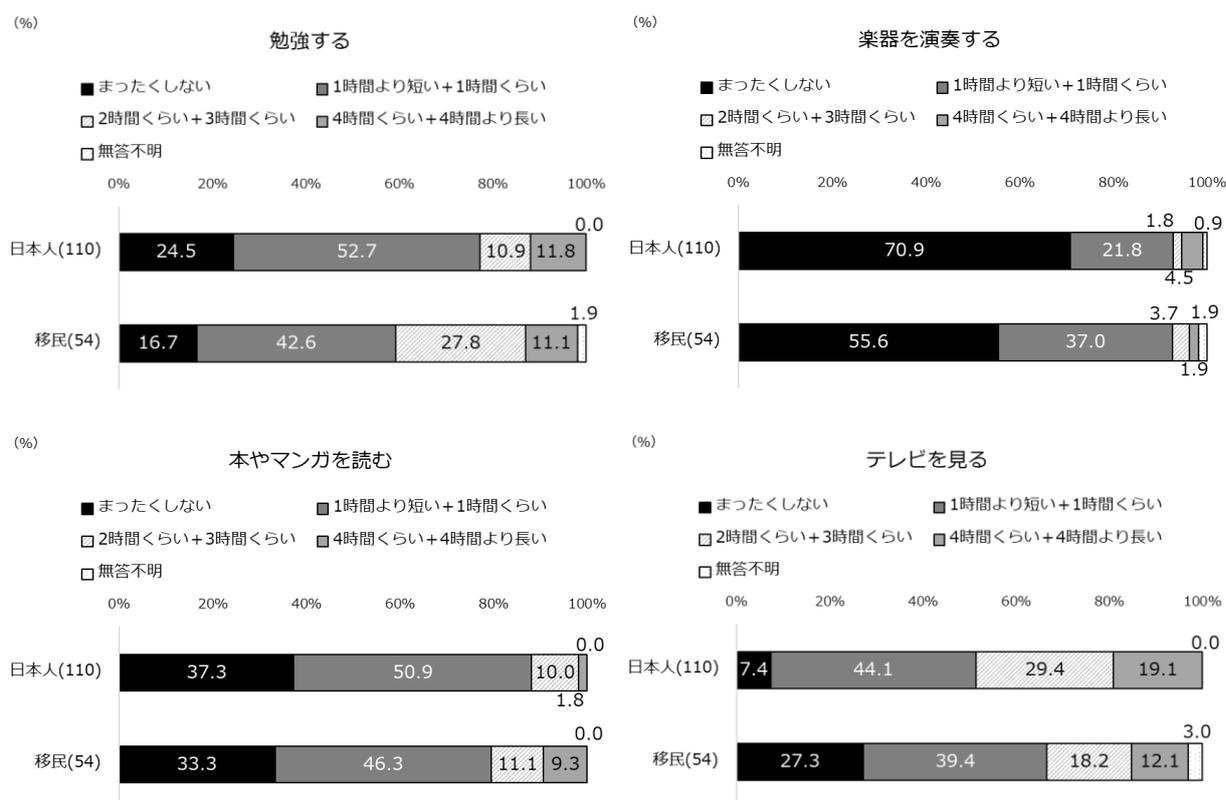
2.7 休日の生活時間

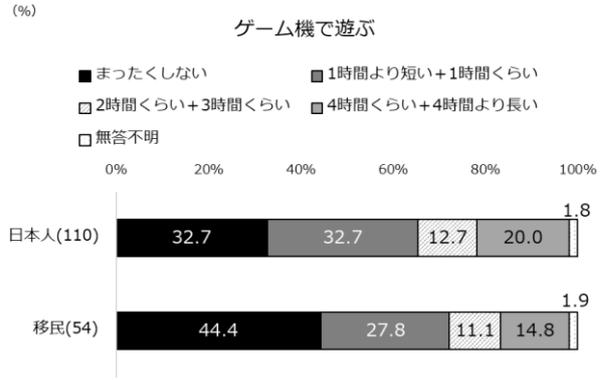
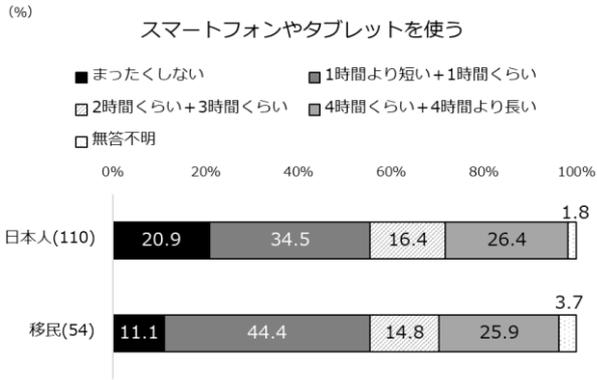
休日の生活時間について、「まったくしない」から「4 時間より長い」までの 7 段階でたずね、いくつかの
 カテゴリーを合計した値を示した(図表 2-7)。なお、「スポーツや体を動かす遊びをする」は前節で言及し
 たため割愛する。

「勉強する」をみると、日本人では「まったくしない」24.5%、「1 時間より短い+1 時間くらい」52.7%で合
 わせて 77.2%であるのに対して、移民では「まったくしない」16.7%、「1 時間より短い+1 時間くらい」42.6%で合
 わせて 59.3%であり、日本人のほうが勉強時間は短い傾向にある。2 章 4 節の習いごとでも示したように、
 移民には中学受験に向けて塾に通っている児童が多い点も影響していると考えられる。ほかに移民のほ
 うが時間の長い傾向にある項目としては、「楽器を演奏する」「本やマンガを読む」があげられる。「楽器を
 演奏する」では「まったくしない」が日本人 70.9%>移民 55.6%であるのに対して、「1 時間より短い+1 時間
 くらい」は日本人 21.8%<移民 37.0%と約 15 ポイントの差がみられる。「本やマンガを読む」では「4 時間く
 らい+4 時間より長い」が日本人 1.8%<移民 9.3%と、移民のほうが高い。

一方で、「テレビを見る」「ゲーム機で遊ぶ」は、日本人のほうがより長時間に分布している。「まったくし
 ない」の割合に着目すると、「テレビを見る」は日本人 7.4%<移民 27.3%、「ゲーム機で遊ぶ」は日本人
 32.7%<移民 44.4%で、これらのメディアに接触していない児童は移民のほうが多い。

図表 2-7 休日の生活時間



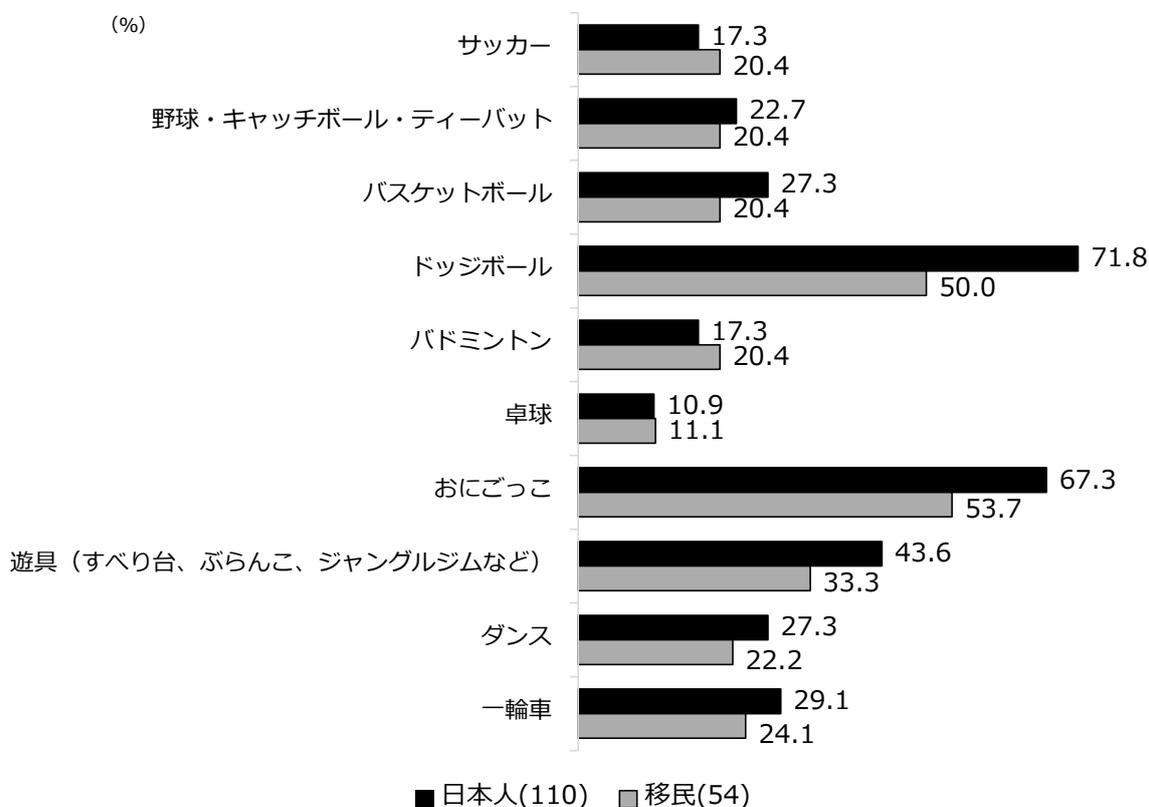


2.8 授業以外で行ったスポーツや運動遊び

児童が調査当時の学年になってから学校の授業以外で行ったスポーツや運動遊びの内容をたずねた。最初に休み時間や放課後など、学校で行った内容を示す(図表 2-8-1)。「ドッジボール」(日本人 71.8% > 移民 50.0%、以下同)と「おにごっこ」(67.3% > 53.7%)はいずれも 5 割以上の児童が実施しているものの、日本人と移民の差がみられ、特にドッジボールでは 20 ポイント以上の開きが確認された。ドッジボールやおにごっこには多様なルールがあり、途中で変更されることもある。言語の壁がある児童にとっては、状況の違いや変化を理解するのが難しく、参加しづらい側面があると推察される。また、1 種目でも行ったか否かで分けて学校でのスポーツ・運動遊びの実施率を算出したところ、日本人 90.0% > 移民 70.4%と、約 20 ポイントの差がみられた(図表 2-8-2)。2~3 年生と 4~6 年生に分けて分析すると、2~3 年生では日本人 95.2% > 移民 81.0%、4~6 年生では 86.8% > 63.6%となり、高学年になると移民の約 4 割が校内でスポーツや運動遊びに参加していないことがわかる。

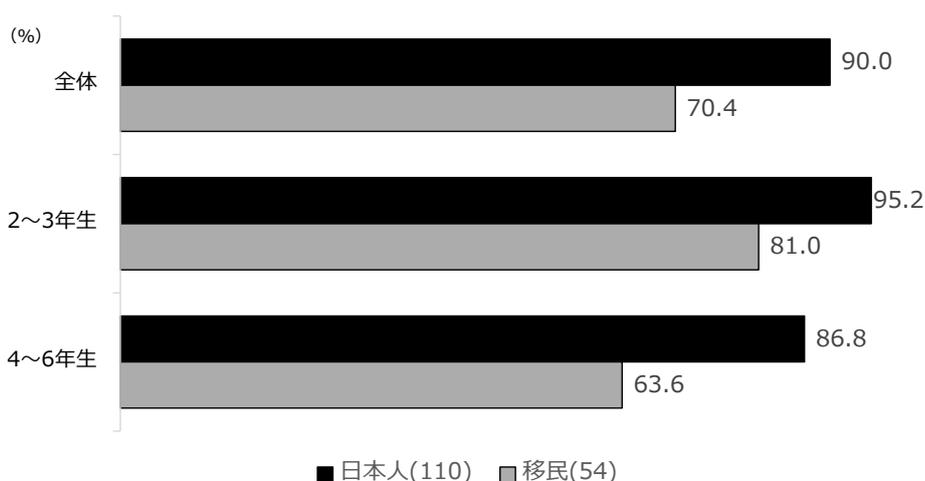
図表 2-8-1 および図表 2-8-2 を性別で分析した結果を図表 2-8-3 に示した。日本人男子は「ドッジボール」や「学校におけるスポーツや運動遊びの実施率」などの割合がほかの群と比べて高く、日本人女子は「おにごっこ」や「遊具」などが相対的に高かった。移民女子では「バドミントン」や「ダンス」の割合がほかの群より高いものの、移民男子は全体的に低い数値が多く、「学校におけるスポーツや運動遊びの実施率」は 67.6%と各群の中で最も低い。同じように学校で遊んでいても属性によって内容に差がみられ、特に男子や高学年の移民児童では運動遊びの実施率が低い状況が浮かび上がった。

図表 2-8-1 学校で行ったスポーツや運動遊び



注) 複数回答。

図表 2-8-2 学校で行ったスポーツや運動遊びの有無



注) 図表 2-8-1 に掲載した種目のうちいずれかを実施している児童の割合を示している。

図表 2-8-3 学校で行ったスポーツや運動遊び(性別)

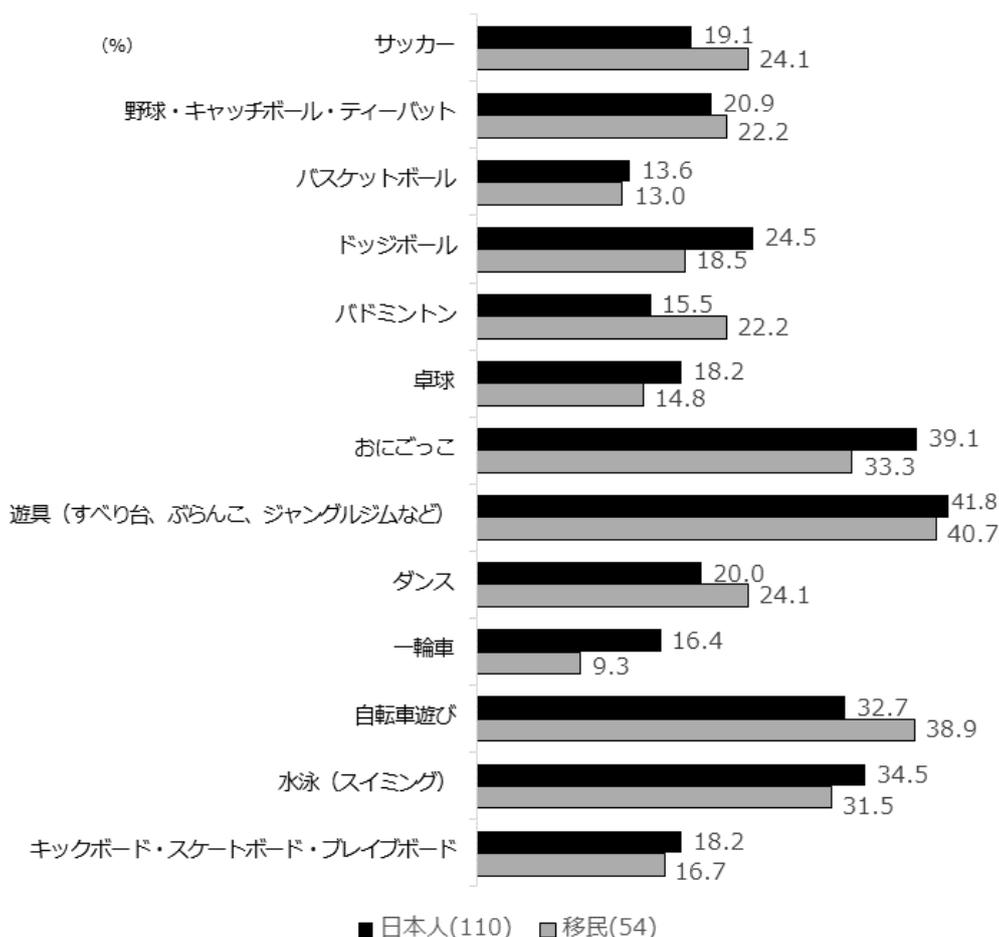
		(%)	
		男子	女子
サッカー	日本人	24.1	10.7
	移民	20.6	20.0
野球・キャッチボール・ティーバット	日本人	27.8	17.9
	移民	23.5	15.0
バスケットボール	日本人	29.6	25.0
	移民	23.5	15.0
ドッジボール	日本人	81.5	62.5
	移民	58.8	35.0
バドミントン	日本人	13.0	21.4
	移民	17.6	25.0
卓球	日本人	11.1	10.7
	移民	11.8	10.0
おにごっこ	日本人	61.1	73.2
	移民	47.1	65.0
遊具(すべり台、ぶらんこ、 ジャングルジムなど)	日本人	40.7	46.4
	移民	32.4	35.0
ダンス	日本人	24.1	30.4
	移民	14.7	35.0
一輪車	日本人	22.2	35.7
	移民	17.6	35.0
学校におけるスポーツや運動遊びの実施率	日本人	90.7	89.3
	移民	67.6	75.0

注) 複数回答。「学校におけるスポーツや運動遊びの実施率」は、「サッカー」から「一輪車」までのいずれかを実施している児童の割合を示している。

続いて、学校以外の場合(習いごとを含む)で行ったスポーツや運動遊びの内容を示す(図表 2-8-4)。日本人のほうが多いものとして、「ドッジボール」(日本人 24.5% > 移民 18.5%、以下同)、「おにごっこ」(39.1% > 33.3%)、「一輪車」(16.4% > 9.3%)があげられる。ただし、図表 2-8-1 で示した学校で行ったスポーツや運動遊びに比べると差は小さい。また、「サッカー」(19.1% < 24.1%)、「バドミントン」(15.5% < 22.2%)、「自転車遊び」(32.7% < 38.9%)は移民のほうが多い。1 種目でも行ったか否かで分けて、学校以外でのスポーツ・運動遊びの実施率を算出したところ、日本人 71.8% < 移民 77.8%と、移民のほうが高かった(図表 2-8-5)。2~3 年生と 4~6 年生に分けてみると、低学年では移民の実施率が高く、高学年ではほぼ同じであった。学校内の遊びのように高学年になるほど差が開く傾向はみられず、種目には若干の違いがあるものの、日本人も移民も同程度の児童が学校以外でスポーツや運動遊びを行っていることがわかった。

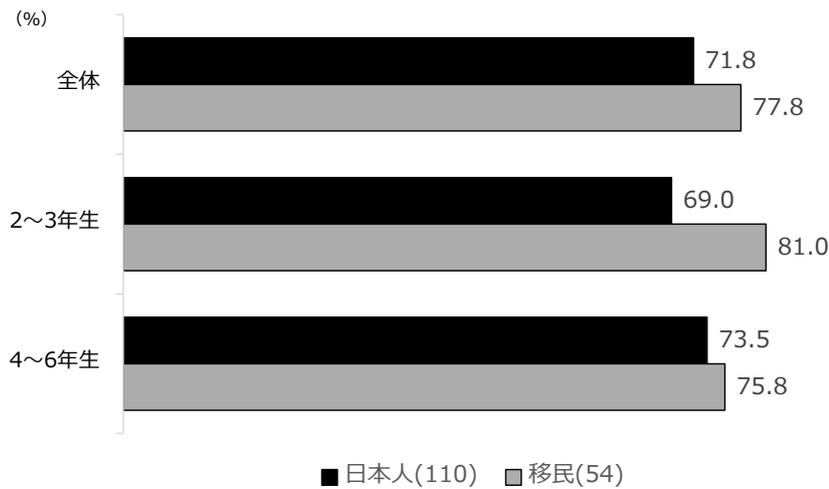
図表 2-8-4 および図表 2-8-5 を性別で分析した結果を図表 2-8-6 に示した。校内のスポーツや運動遊びと同様に、「ドッジボール」は日本人男子が最も高く、「おにごっこ」は日本人女子で最も高いといった傾向はみられるが、群ごとの差は比較的小さい。移民女子では「遊具」「ダンス」「自転車遊び」の割合がほかの群に比べて高く、移民男子では「バドミントン」や「水泳」が高い割合を示した。「学校以外におけるスポーツや運動遊びの実施率」はいずれの群も 6~7 割台となり、日本人と移民の間で顕著な差はみられなかった。

図表 2-8-4 学校以外で行ったスポーツや運動遊び



注) 複数回答。

図表 2-8-5 学校以外で行ったスポーツや運動遊びの有無



注) 図表 2-8-4 に掲載した種目のうちいずれかを実施している児童の割合を示している。

図表 2-8-6 学校以外で行ったスポーツや運動遊び(性別)

		(%)	
		男子	女子
サッカー	日本人	33.3	5.4
	移民	32.4	10.0
野球・キャッチボール・ティーバット	日本人	35.2	7.1
	移民	29.4	10.0
バスケットボール	日本人	20.4	7.1
	移民	17.6	5.0
ドッジボール	日本人	29.6	19.6
	移民	20.6	15.0
バドミントン	日本人	13.0	17.9
	移民	23.5	20.0
卓球	日本人	20.4	16.1
	移民	14.7	15.0
おにごっこ	日本人	38.9	39.3
	移民	35.3	30.0
遊具(すべり台、ぶらんこ、 ジャングルジムなど)	日本人	42.6	41.1
	移民	35.3	50.0
ダンス	日本人	14.8	25.0
	移民	20.6	30.0
一輪車	日本人	9.3	23.2
	移民	11.8	5.0
自転車遊び	日本人	29.6	35.7
	移民	32.4	50.0
水泳(スイミング)	日本人	37.0	32.1
	移民	38.2	20.0
キックボード・スケートボード・ ブレイブボード	日本人	13.0	23.2
	移民	14.7	20.0
学校以外におけるスポーツや運動遊びの実施率	日本人	75.9	67.9
	移民	79.4	75.0

注) 複数回答。「学校以外におけるスポーツや運動遊びの実施率」は、「サッカー」から「キックボード・スケートボード・ブレイブボード」までのいずれかを実施している児童の割合を示している。

2.9 好きな運動・スポーツ

児童に「するのが好きな運動やスポーツ」「見るのが好きな運動やスポーツ」「好きなスポーツ選手」を自由記述で回答してもらった。それぞれ該当する種目や選手がある場合にはひとつずつ記入するように指示したが、複数の種目や選手を記入するほか、無記入や「なし」という回答もみられた。複数回答はすべて集計に含め、上位3つをランキング形式でまとめたのが図表2-9である。

「するのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の児童90名、移民の児童44名が具体的に記入していた。日本人では「野球」が12名と最も多く、「サッカー」11名、「水泳」「ドッジボール」10名と続いた。移民の1位は「水泳」11名で、「サッカー」「バドミントン」7名が続く。移民では、体育の単元でも水泳を好きとする児童が多く(2章2節参照)、人気の高さが示されている。また、日本人では「ドッジボール」、移民では「バドミントン」と、普段行う種目があげられている(2章8節参照)。

「見るのが好きな運動やスポーツ」については、日本人の児童66名、移民の児童34名が具体的に記入していた。日本人では「野球」20名が特に多く、「サッカー」9名、「バスケットボール」8名が続く。移民では「サッカー」9名、「野球」7名、「テニス」4名と、サッカーが多いものの回答が比較的分散している。「するのが好きな運動やスポーツ」と合わせて、日本人の児童には野球が好きな子どもが多いことがわかる。

「好きなスポーツ選手」については、日本人の児童38名、移民の児童19名が回答した。日本人・移民ともに「大谷翔平」が1位となり、ほかの選手を上回る回答数であった。

図表2-9 好きな運動・スポーツ

	するのが好きな運動やスポーツ			見るのが好きな運動やスポーツ			好きなスポーツ選手		
	順位	種目	回答数	順位	種目	回答数	順位	選手名	回答数
日本人	1	野球	12	1	野球	20	1	大谷翔平	9
	2	サッカー	11	2	サッカー	9	2	岡本和真	2
	3	水泳	10	3	バスケットボール	8	2	羽生結弦	2
	3	ドッジボール	10				2	リオネル・メッシ	2
移民	1	水泳	11	1	サッカー	9	1	大谷翔平	7
	2	サッカー	7	2	野球	7		(以下は各1名が回答)	
	2	バドミントン	7	3	テニス	4			

2.10 運動有能感・楽しさ

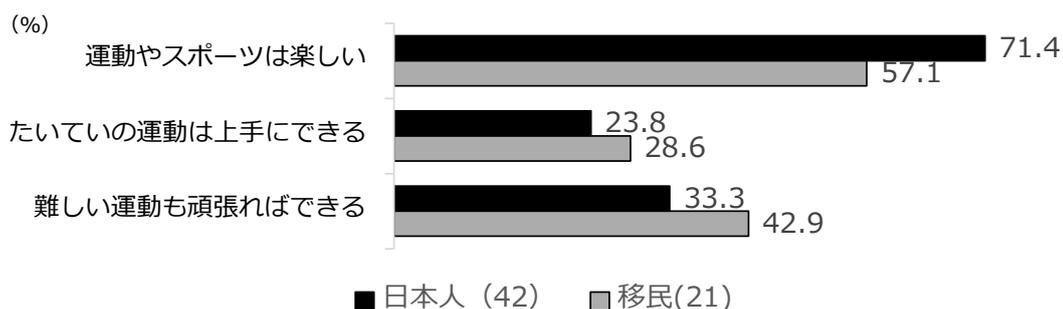
運動有能感や運動・スポーツの楽しさについてたずねた。参照している運動有能感の尺度に低学年版と高学年版があることから、本調査では2～3年生と4～6年生で異なる表現を用い、かつ回答負荷を考慮して2～3年生の項目数をより少なくしている。

2～3年生はサンプル数が限られるものの、「運動やスポーツは楽しい」は日本人71.4%>移民57.1%と日本人のほうが高いのに対して、統制感の1項目である「難しい運動も頑張ればできる」では33.3%<42.9%と移民のほうが高かった(図表2-10-1)。

4～6年生では「運動やスポーツが好きだ」「運動やスポーツをするのは楽しい」で日本人が6割を超えたのに対して、移民は5割を下回った。身体的有能さの認知(「たいていの運動は上手にできる」「運動やスポーツには自信がある」)や統制感(「難しい運動でも努力すればできる」「練習をすれば、必ず記録はのびる」)では顕著な差はみられなかった(図表2-10-2)。

受容感をみると、「運動をしていると、友だちがはげましてくれる」の差は小さかったが、「先生がはげましてくれる」では日本人29.4%>移民18.2%と10ポイント以上の差がみられた。校内でスポーツや運動遊びに参加していない児童(2章8節参照)や、日本語での会話が難しい児童がいる状況での指導の難しさを示す結果でもある。

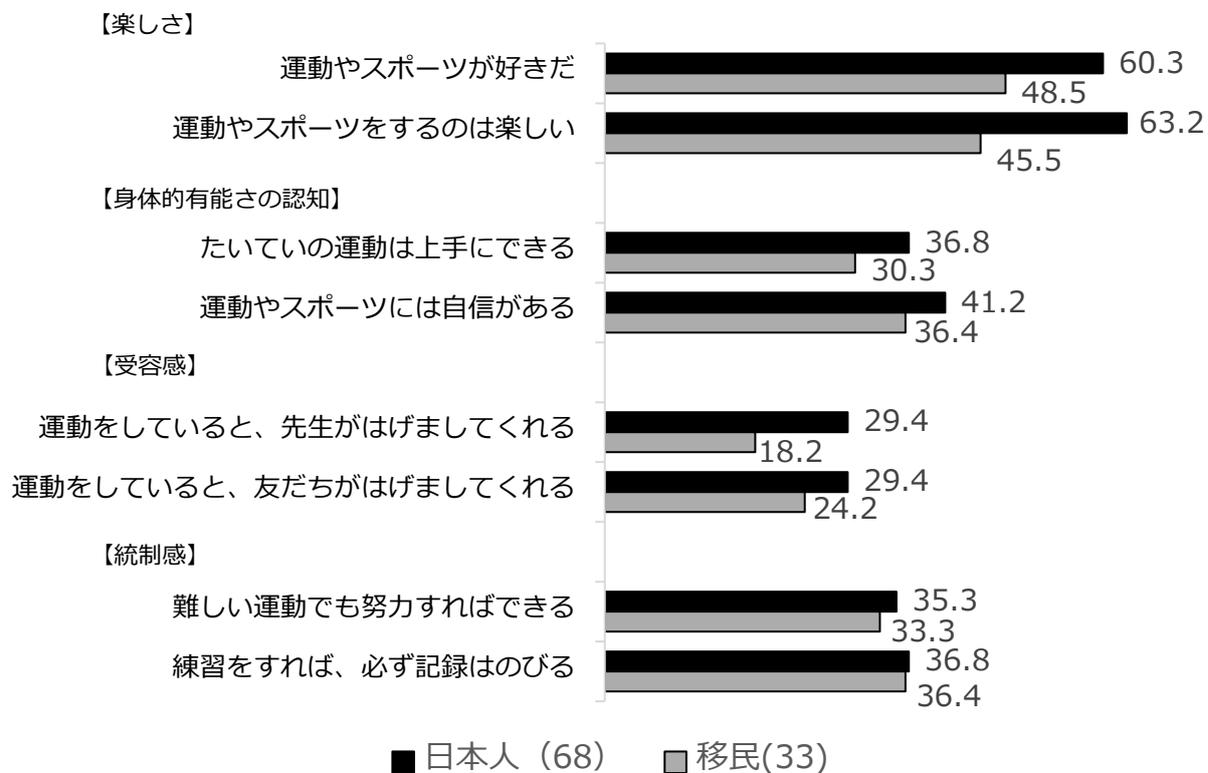
図表 2-10-1 運動有能感・楽しさ(2～3年生)



注)「とてもあてはまる」の%。

図表 2-10-2 運動有能感・楽しさ(4~6年生)

(%)

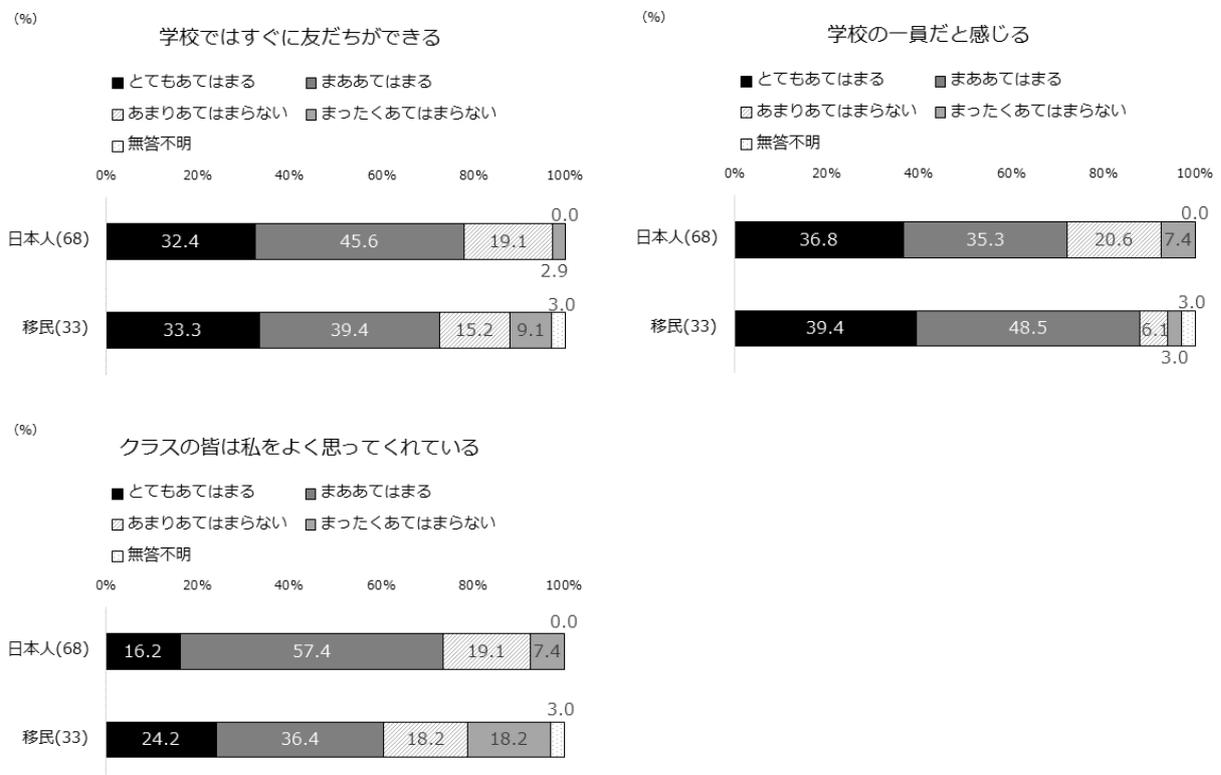


注)「とてもあてはまる」の%。

2.11 学校生活

ここからは4～6年生のみにたずねている項目の結果を紹介する。PISA2022(OECD 生徒の学習到達度調査)における学校への所属感の質問項目を参照し、A 小学校での生活についてたずねた(図表 2-11)。「学校ではすぐに友だちができる」は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計値を算出すると、日本人 78.0%、移民 72.7%で大きな差はみられない。「学校の一員だと感じる」で同様に合計値を確認すると、日本人 72.1%、移民 87.9%で、移民のほうが約 15 ポイント高い。「クラスの皆は私をよく思ってくれている」では日本人 73.6%、移民 60.6%と日本人のほうが高い。移民では 24.2%が「とてもあてはまる」と回答する一方で、「まったくあてはまらない」も 18.2%であり、同級生に受け入れられていると感じる児童とそうでない児童がいることがわかる。

図表 2-11 学校生活



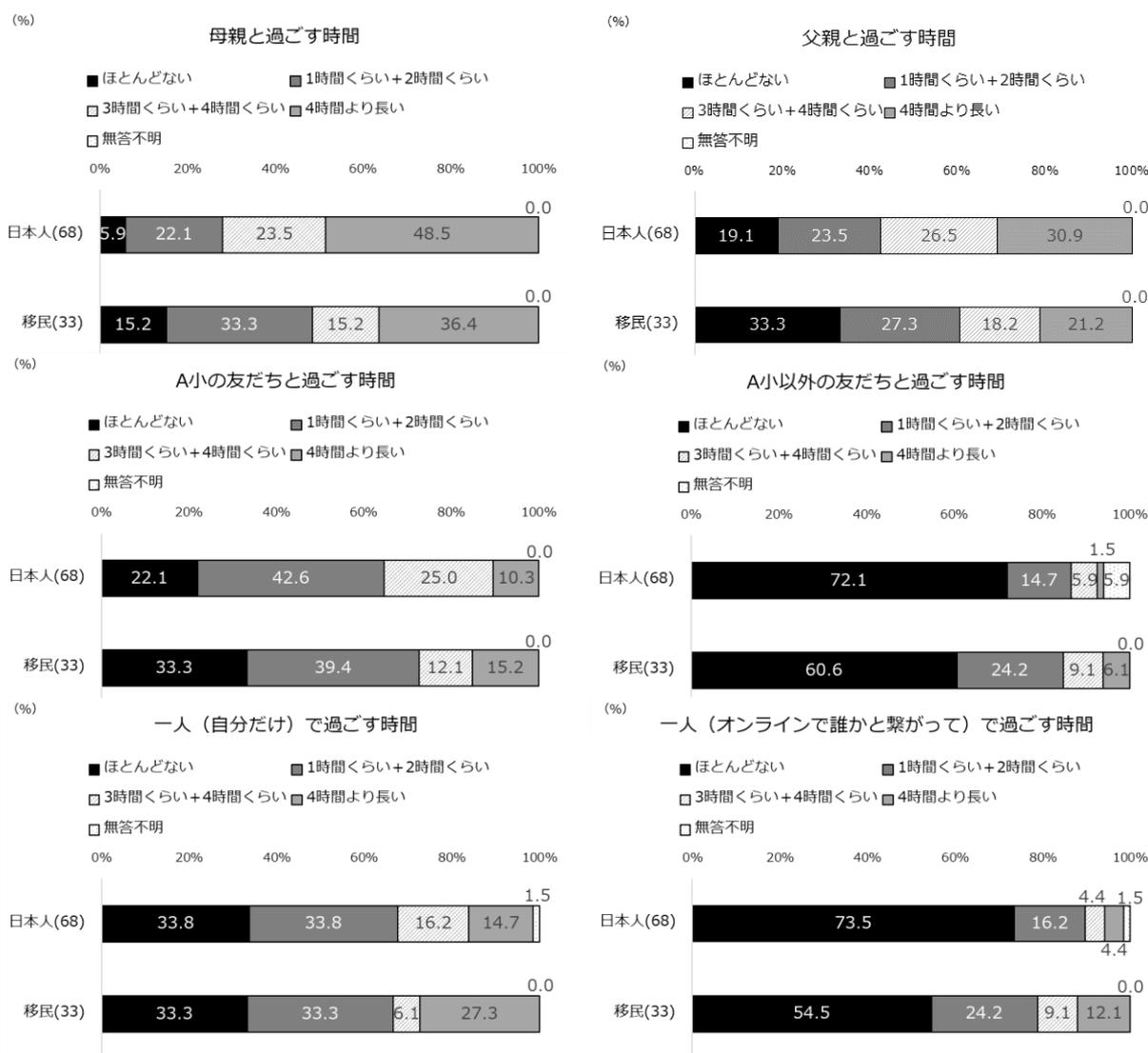
2.12 誰かと過ごす時間

放課後に誰とどのくらいの時間を一緒に過ごしているのかをたずねた(図表 2-12)。就寝中は除き、家族や親族に関して一緒に暮らしていない場合には「ほとんどない」を選択してもらっている。

母親と過ごす時間について、「4 時間より長い」は日本人では 48.5%と半数近くに達する一方で、移民では 36.4%にとどまり、「ほとんどない」「1 時間くらい+2 時間くらい」が相対的に高かった。父親と過ごす時間も同様の傾向がみられる。友だちと過ごす時間をみると、A 小学校の友だちに関しては移民では「ほとんどない」が 33.3%と日本人に比べて高い一方で、「4 時間より長い」児童も 15.2%いる。A 小学校以外の学校の友だちと過ごす時間をみると、移民では「ほとんどない」が 60.6%で日本人よりも約 10 ポイント低く、「4 時間より長い」は 6.1%である。総じて日本人と移民の児童が友だちと過ごす時間には明確な長短の差はないものの、移民では A 小学校以外の学校の友だちと過ごしている児童がやや多い特徴が見出せる。

最後に一人で過ごす時間をみると、自分だけで過ごす時間は移民で「4 時間より長い」が 27.3%と多い傾向にある。また、一人だがオンラインで誰かとつながって過ごす時間は、「ほとんどない」が日本人よりも約 20 ポイント低い 54.5%で、「4 時間より長い」は 12.1%である。

図表 2-12 誰かと過ごす時間

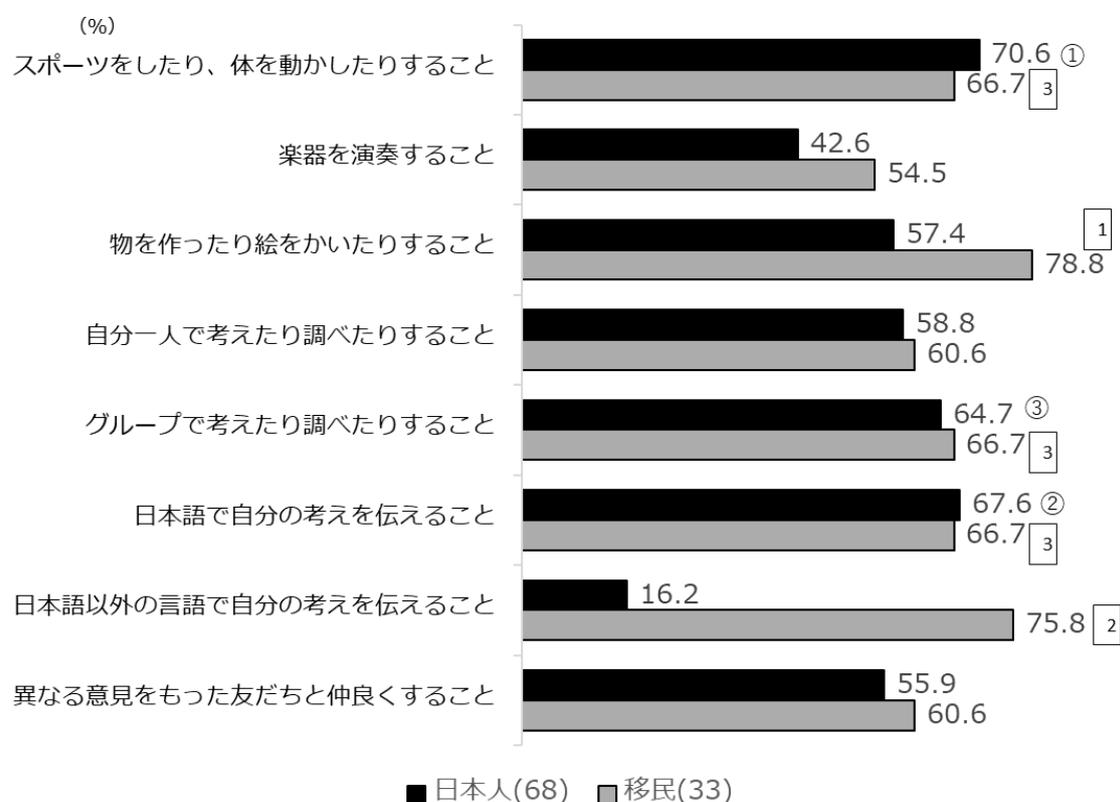


2.13 得意なこと

子どもたちが得意だと感じることや苦手だと感じることをたずね、「とても得意」と「やや得意」の合計値を示した(図表 2-13)。日本人では「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」70.6%、「日本語で自分の考えを伝えること」67.6%、「グループで考えたり調べたりすること」64.7%の順に多く、移民では「物を作ったり絵をかいたりすること」78.8%、「日本語以外の言語で自分の考えを伝えること」75.8%、「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」「グループで考えたり調べたりすること」「日本語で自分の考えを伝えること」66.7%であった。

全体的に移民の児童は「得意」と回答する割合が高い。特に「日本語以外の言語で自分の考えを伝えること」は日本人を約 60 ポイント上回るが、「日本語で自分の考えを伝えること」では両者の差はみられない。

図表 2-13 得意なこと



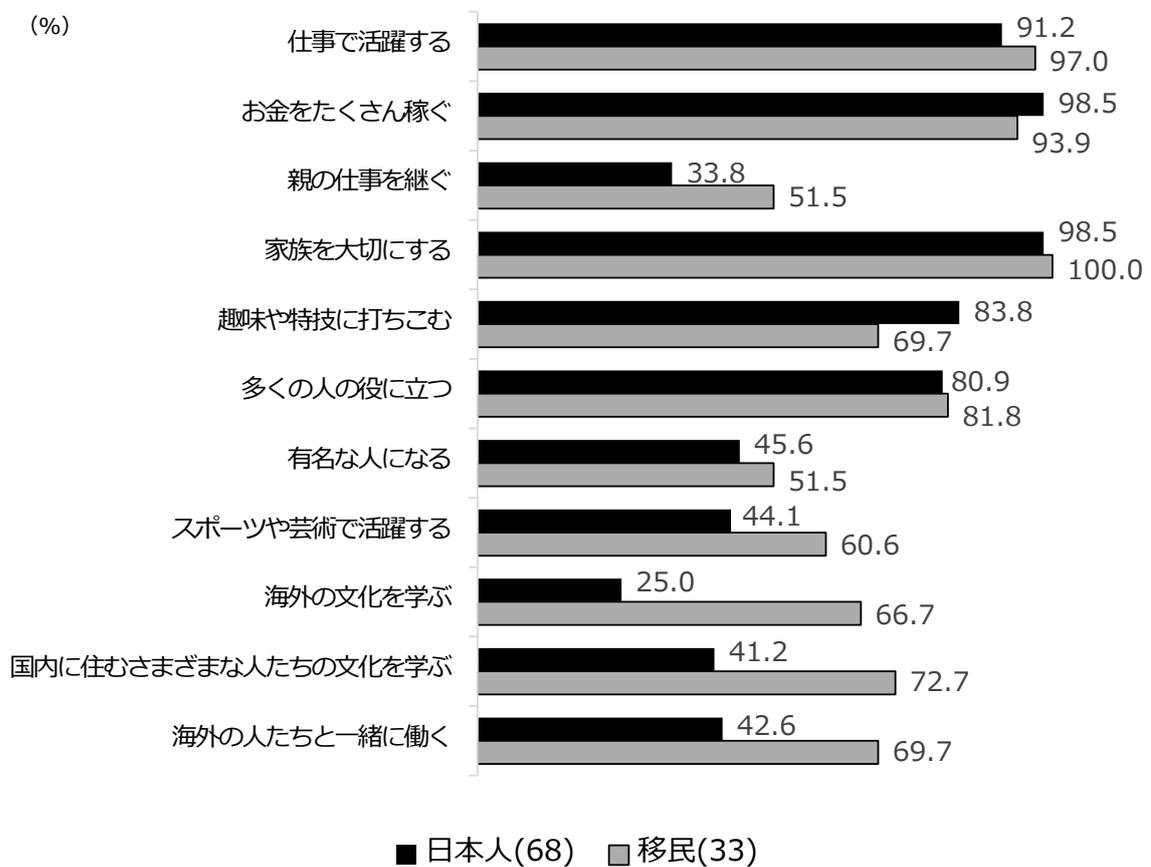
注 1) 「とても得意」+「やや得意」の%。

注 2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

2.14 将来のイメージ

「あなたは大人になったとき、どのように過ごしたいと思いますか」とたずねた(図表2-14)。日本人・移民ともに、「仕事で活躍する」(日本人 91.2%、移民 97.0%、以下同)「お金をたくさん稼ぐ」(98.5%、93.9%)「家族を大切にする」(98.5%、100.0%)「多くの人の役に立つ」(80.9%、81.8%)の数値が高い点は共通している。「趣味や特技に打ちこむ」(83.8% > 69.7%)は日本人のほうが 14.1 ポイント高く、「親の仕事を経営」(33.8% < 51.5%)「スポーツや芸術で活躍する」(44.1% < 60.6%)「海外の文化を学ぶ」(25.0% < 66.7%)「国内に住むさまざまな人たちの文化を学ぶ」(41.2% < 72.7%)「海外の人たちと一緒に働く」(42.6% < 69.7%)などは移民のほうが高い。特に外国の文化、国内の多様な文化に対する意識で差が大きく、移民の子どもたちには、国際的な視野や文化の多様性への意識をもっている児童が多いことがうかがえる。

図表 2-14 将来のイメージ

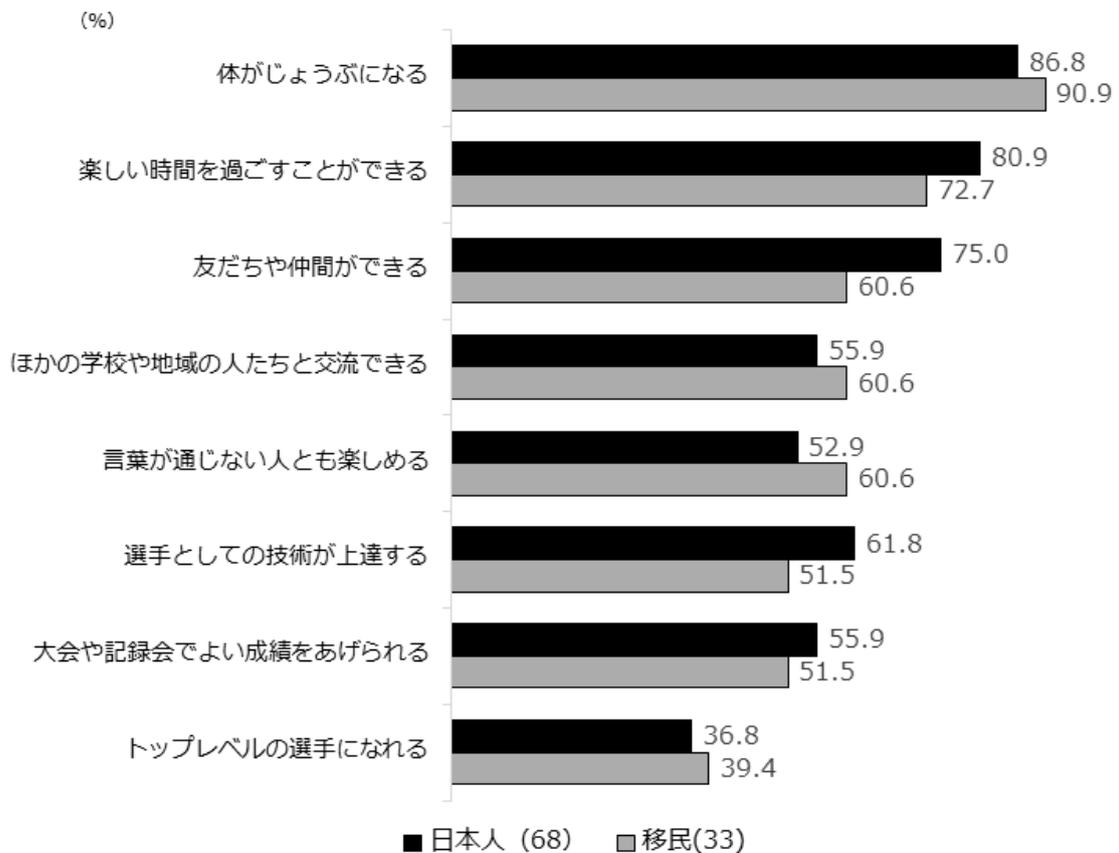


注) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

2.15 スポーツの価値

「あなたがスポーツをしたら、次のことができますか」という質問文を用いて、スポーツの価値についてたずねた(図表 2-15)。日本人・移民ともに「体がじょうぶになる」(日本人 86.8%、移民 90.9%)、「楽しい時間を過ごすことができる」(日本人 80.9%、移民 72.7%)が高く、ほとんどの児童が肯定している。ほかの項目もおよそ日本人と移民の傾向は共通しているが、「友だちや仲間ができる」は日本人 75.0%>移民 60.6%と、約 15 ポイントの差がみられた。一方で「ほかの学校や地域の人たちと交流できる」「言葉が通じない人とも楽しめる」はいずれも移民は 60.6%となり、日本人をわずかに上回る結果であった。

図表 2-15 スポーツの価値



注) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

コラム① 体育の授業

2 学期のある日、ソフトバレーボールをもとにしたゲーム(ネット型のボール運動)の授業を見学した。指導要領上、5～6 年生では「ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること」が目標に掲げられている。この授業でも、冒頭で教員が児童に対し、今日のゲームのルールについて意見を求める場面があった。教員はボードなどを用いて視覚的に伝える工夫をしているが、この授業には通訳が同行しておらず、発言するのは日本語でスムーズにやり取りできる児童のみであった。ルールが決定すると、まずは各自がボールを持ち、自由にトスなどの練習をする時間が設けられた。この時間になると、日本語の会話が難しい児童が、目を輝かせて夢中になる様子がみられた。しかし、いざゲームが始まると、一人は教員の横で得点ボードをめくる係を担当していた。

体育の授業を通じて、異なる背景をもつ児童同士がスポーツを楽しむ力を育むのが理想であるが、現実には、日本語でコミュニケーションが可能な児童を中心に授業が進行する。現行の体育の枠組みの中で可能な対応を模索するとともに、体育以外のスポーツの場面で可能な取り組みを検討する必要がある。